見本

令和三年度前期日程入学試験学力検査問題

国　語

文学部・教育学部・法学部・経済学部（文系）

令和三年二月二十五日　十三時三十分～十六時（一五〇分）

注　意　事　項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子、解答用紙を開いてはいけない。

二、この問題冊子は、二十一ページである。問題冊子の白紙のページや問題の余白は草案のために使用してよい。なお、ページの脱落、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。

三、解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペン・万年筆などを使用してはいけない。

四、解答用紙の受験記号番号欄（一枚につき二か所）には、忘れずに受験票と同じ受験記号番号をはっきりと判読できるように記入すること。

五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。各問とも解答の指定字数には句読点・括弧等を含む。

六、解答用紙を持ち帰ってはいけない。

七、試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

一　次の文章を読んで問いに答えよ。

その日も横になることが日課であるかのように、横たわっていた。じっと横たわることが仕事なのだと自分に言い聞かせて、ごろごろしているのである。午後のことである。突如家屋の下の地面が(1)カンボツしたと感じられるほどの揺れが来て、その後大きな横揺れが続いた。部屋の本棚が揺れながら倒れかかるのではないかと感じられるほどの横揺れである。私は機敏にからだを動かして移動することもできない状態だから、ともかく小康状態になるまで待つしかない。大揺れが収まると、ともかくもからだを移動させて、階下のテレビを付けてみた。高台の幹線道路を走るトラックが列となって停止しており、周囲の田畑を覆うように海水が遡っている。いずれ幹線の列をなしたトラックも海水に浮かび押し流されていくに違いない。このヘリコプター映像には、端っこの方で煙が上がっている。海岸沿いの原発施設はどのようになっているのかと疑念が浮かぶ。二〇一一年三月十一日の大震災の開始の一場面である。こうした何世代かに一度の事象に直面したとき、誰にとっても過去の経験は役には立たない。またそこでの思いは、(ア)持って行き場がない。

それからずいぶんと時間は経過した。これほどの大規模な緊急事態に対して、哲学はいったい何ができるのか。これはそれ以降現在も抱えたままの問いであり、課題である。どのようにささやかにすぎることであっても確実にこれだという手続きや手順が見つかれば、思いは持って行き場を見つけたことになる。もちろん一般的になすべきことは無数にある。だがそれが惰性になれば、確実にたんなる自己満足に入り込んでしまう。こんな思いを抱えながら、なお試行錯誤を繰り返すよりない。たとえ持って行き場がなくても、なお前に進むことはできるに違いない。

かつて吟遊詩人と呼ばれた人たちがいる。一般には、宮廷音楽師ではなく、諸国を遍歴しながら歴史的な事件や史実についての物語を編み出し、歌い伝えるものたちである。ヨーロッパ中世の八世紀ころから十五世紀ころにかけて、歴史的な記録が残っており、ヨーロッパ各地でさまざまな呼び名で呼ばれていた。ギリシャでは、アオイドスと呼ばれ、近代語では、ジョングルー

ルやミンストレルと呼ばれた人たちがそれに相当する。日本で言えば、平家物語を歌う琵琶法師がそれにあたる。職業としては流しの歌手だが、ときとして各地の事件や諸相を歌い上げて、詩歌の作詞、作曲を行い、語り継ぐ者たちもいたようである。一般的には歌を紡ぎ、声をかたちにして伝えていくものたちである。少し特殊な職能をもつものもいて、宗祇や心敬のような連歌師は、連歌の作り手として各地の大名に招かれ、連歌を教えていた。芭蕉や惟然のような俳諧師も各地を転々としながら一宿一飯の恩義のように、作品を残した。

おそらくそうした仕事のなかにも、思い余ったまま言葉にならない事態に直面したり、身の丈をはるかに超え出た自然事象に立ち尽くすよりない場面でも、その場にいて、なにかしら言葉を紡ぎ出し、思いにかたちをあたえてくれる人たちもいたと思われる。それはたとえ言葉を失ってもなおそこにいるだけで、無言のまま何かを語る人たちである。あるいはその場の声にならない声を感じ取り、その場になにかのきっかけをあたえる者たちである。さらには予想外の言葉の断片が、新たな脈絡を見出すようにその場の雰囲気に(2)リンカクをあたえ、リセットしていく人たちである。周囲の人達はおのずと感謝の意をこめてもてなし、ひと時のねぎらいで恩に報いることになる。万葉集や古今集にも、そうした表現はある。

山上憶良という万葉の歌人がいる。国家や天皇家の行く末がいままさに盛んであることを高らかに歌い上げる宮廷歌人とは異なり、(イ)貧窮と寒さに耐えることを歌ったような長詩や短歌を残している。ささやかな日常に目を向け、言葉にしても誰に届くわけでもないような情感をかたちにしている。官僚であった本人自身が貧窮であったとは考えにくいので、立ち会ったその場の雰囲気や、聞かされた情景を詠んだものだと思われる。

貧窮を言葉にすることは、誰かに向かって改善を求めて自分の貧しさを訴えようとしているのではない。少なくとも憶良の歌にはそうした意向は出ていない。ましてや自分の困窮を嘆いているのでもない。だが持って行き場のない思いはある。その思いに区切りをあたえるような歌になっている。こうした万葉集では例外的な情感を歌っているために、山上憶良は「帰化人系」の人ではないかと言われたことがある。だが歌はあらかじめ届く先を決めておく必要もなく、またみずからの慰めに留まる必要もない。

吟遊詩人に匹敵するだけの言葉を、哲学はもつことができるのだろうか。それをさしあたり「吟遊哲学」と呼んでおく。自説が受け入れられず迫害をあまんじて呑(の)み込み、エトナ山に向かう老いたるエンペドクレスや、終生居場所がなく一宿一飯の恩義のように『痴愚神礼讃(ちぃさん)』を書き上げたエラスムスや、失意のなかでパリからスイスに帰ってくるルソーは、そうした事例なのかもしれない。各人の人生上の行きがかりは、それぞれに固有の形をとるが、いずれもどこかに「放浪する言葉」が含まれている。一貫して世界や人間についての説明をあたえようとするのではなく、また整合的な説明図式をあたえようとしているのでもない。だが日々の日記やエッセイや自伝のようなものではない。彼らには放浪する言葉だけではなく、「哲学を捨てていく言葉」が含まれている。吟遊する哲学とは、ある種の「捨てる覚悟」のことかとも思える。時間と労力をかけて獲得し、修得したものを、みずから捨てるのである。この捨てるところが、新たな経験の出現の場所でもある。ルソーの『孤独な散歩者の夢想』の「第三の散歩」の(3)ボウトウでは、次のように語っている。

「われ常に学びつつ老いぬ」

ソロンは晩年、この言葉を何度も繰り返している。年老いた私の身にも、この詩句の意味は思い当たるものがある。だが、私が二十年かけて(4)ツチカってきた知識は実に悲しいものだ。こんなことなら無知のままでいたほうがましだった。逆境は、いい教師だが、その授業料は高い。多くの場合、学んだことの有益性よりも、支払う代価のほうが高くつく。

（永田千奈訳、光文社古典新訳文庫）

ルソーの場合には特殊な事情も絡む。主著である『エミール』や『社会契約論』が焚書(ふんしょ)となり、逮捕状が出たのである。追われるようにヌーシャテルに避難し、プロイセンに滞在許可をもとめて、フリードリヒ二世から許可をえる。ルソー五十歳の時である。ルソーの場合、ここからさらに十年近く騒動の(5)カチュウに巻き込まれるが、ルソー自身も反撃を繰り返し、ジュネーヴ評議会もそれに応戦している。波乱万丈の後半生である。

晩年の『告白』や『孤独な散歩者の夢想』は、弁明を籠めた自伝の体裁をとっているが、そのなかにも「知を捨てていくこと」の経験ののびやかさや、小さな心の起伏の弾力のようなものが出現している。ことにルソーの場合、たとえ老境にあっても、植物の観察に躍動しながら機微に触れる心の作動の快が回復されていく。

(ウ) 捨てることのなかで初めて見えてくるものもある。かつてアーティストのマルセル・デュシャンが、自転車をひっくり返し、いくつかの部品を取り去って、捨てながらおのずと止まる場面を探しだし、それをそのまま作品としたことがあった。自転車は、技術的には完成品に近く、小さな改良はあるが、機能的には完成の回路に入った技術であり、道具である。そこにはもはや多くの選択肢は残されてはいない。そこでその手前に戻ってみる。制作のプロセスは、ほとんどの場合、完成品に近づくように組み立てられる。そこでそれを逆回しにするようにして、手前に戻してみる。捨てていくのである。そうすると捨てることのなかでおのずと止まる局面がある。そこでは別様に進むことのできる道が浮かび上がることもあり、またそのままの状態を維持しても、それはそれとして成立しているような場面もある。多くの哲学の学説は、一貫した整合性を求めて、あるいは「純粋」という言葉に魅せられて、小さな完成品に行きついている。そんなとき捨てる勇気をもち、捨てる覚悟で物事に臨んでみるのである。

人はひとたび獲得したものを無条件で捨てていくことは容易ではない。そんなに簡単に人生はリセットできはしない。みずからの履歴を断ち切ることも容易ではない。一生の間に大きく変わることができるのは、個人差はあるが、二度もしくは三度が限度である。ころころ変わるようでは、いまだリセットでさえない。

次の進み方が見つかれば、すでに身に付いた知識や構想は、おのずと捨てられていく。だが観点や視点を切り替えるようにして、みずからをリセットすることはできない。観点の切り替えにさいして支点のように残っている、当の切り替え操作を行っている基盤そのものには、何も変化が及んでいないからである。たしかに「学んでも何もわからない、行為することが必要である」(ゲーテ)という言葉は、ここでも当てはまっている。

しかし次へと進む道筋がたとえ見えなくても、既存の知識や構想を捨てていくことはできる。それはある意味で言葉の出現する場所へと戻っていくことでもある。言葉の出現する場所とは、経験がそれとしてみずからを組織化する場所でもある。経験の新たな組織化こそ、吟遊哲学の課題の一つなのであろう。そのためには(エ)吟遊する哲学は、ある種の詩人でもなければならない。詩を書けば詩人であるというわけではなく、詩を書いていないので詩人ではないということにもならない。言葉の出現する場所に佇(たたず)み、言葉とともに経験が動きを開始し、経験の動きが言葉とともにかたちをとる行為は、いずれにしろ詩的である。

(河本英夫『経験をリセットする　理論哲学から行為哲学へ』による)

問(一)　傍線の箇所(1)(2)(3)(4)(5)の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問(二)　傍線の箇所(ア)「持って行き場がない」とはどのようなことか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問(三)　傍線の箇所(イ)に「貧窮と寒さに耐えることを歌ったような長詩や短歌」とあるが、なぜそのような詩や歌が作られたと筆者はとらえているか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(四)　傍線の箇所(ウ)「捨てることのなかで初めて見えてくる」とはどのようなことを指すか。本文の内容に即して五十字以内で説明せよ。

問(五)　傍線の箇所(エ)に「吟遊する哲学は、ある種の詩人でもなければならない」とあるが、どういうことか。本文全体の内容を踏まえて九十字以内で説明せよ。

二　次の文章を読んで問いに答えよ。

ホームは駅舎と繋がった一面だけだが、ずいぶん昔――いま七十歳になった父が子どもの頃には、向かい側にもう一面、貨物の引き込み線用のホームがあったらしい。

電化も複線化もできずじまいで廃線になった路線でも、かつては急行列車が日に何便も走っていた。

十年前に亡くなった祖父は、畑仕事のかたわら町役場の職員を定年まで勤め上げた。年に一度か二度、急行列車に乗って、役場の同僚と温泉や海に遠出をするのがなによりの楽しみだったという。

父は、城下町の工業高校に通った。卒業後は、急行列車で大阪に出て、自動車メーカーに勤めたが、都会暮らしは性に合わなかったらしく、母親と結婚すると早々に帰郷して、地方振興局の地元採用職員になった。

私が城下町の普通科高校を卒業したときには、すでにこの路線に急行列車は走っていなかった。二時間に一本あるかないかの鈍行列車も、一輌か、せいぜい二輌編成で、すべて城下町の駅が終点だった。遠くへは行けない。上京したときも、高校時代と同じように鈍行で城下町に出て、そこからバスで一時間ほどかけて空港へ向かった。東京の私大に通い、東京で就職をして、結婚もして、子どもをつくり、そして、いま、家族をなくした。

ホームから線路をぼんやり見つめた。レールはまだ撤去されていなかったが、雑草に覆われ、錆でうっすらと赤茶けて、ああ、もう、ここを列車が走ることは永遠にないんだ、というのを実感する。

私から少し離れて線路を覗き込んでいた翔太は、「東京って、どっち？」と訊いてきた。

「あっちだ」

私が右を指差すと、翔太のまなざしもそれに倣い、東京のほうに体を向けて、じっと遠くを見つめた。

「直接、東京まで行けるわけじゃないんだけど、まあ、大きく見れば、ここから右だ」

返事はなかった。

両親の離婚の話は、もう聞かせている。妻が懇々と説明した。パパとママはこれから別々に暮らし、パパとはめったに会えなくなるし、もしかしたら新しいパパができるかもしれないけれど、いまのパパがあなたのお父さんだというのは、これからもずうっと変わらないんだから……。

どこまで理解して、どこまで受け容れたのかはわからない。あとで妻に聞いた。翔太は、黙ってうなずいたらしい。両親が別れる理由を尋ねることも、別れるのを責めることもなく、ただ、黙って、こくん、と首を前に倒しただけだった、という。

「そろそろ行くか、おじいちゃんもおばあちゃんも待ってるぞ」

声をかけると、翔太は遠くを見たまま、「ねえ――」と言った。「おじいちゃんとおばあちゃんに、バイバイって言ったほうがいい？」

「言わなくていい、そんなの」

「でも――」

「また会えるんだ、会いたくなったらいつでも会えるんだから、べつにお別れじゃないんだって、そうだろ、だからそんなこと言わなくていいし、言うなよ、おばあちゃん寂しがるから」

(ア)早口になった。行くぞ、ほら、行こう、と車に戻る私を、翔太は黙って追ってきた。

夕食のテーブルには、母の心尽くしのご馳走が並んだ。田舎のおばあちゃんだから料理が上手につくれない、と母は申し訳なさそうに謝ったが、翔太は、そんなことないよ美味しいよ、とたくさん食べて、お代わりもした。苦手なニンジンも選り分けずに口に運ぶ。子どもなりに気をつかっているのだろう。ビールの味が少し苦くなった。

両親も、このたびの帰省がどういう意味を持つのかはわかっている。

母はよくしゃべって、よく笑った。もともとおしゃべり好きなひとではあるのだが、ここまで休む間もなく話していると、明日は血圧が上がって具合が悪くなってしまうかもしれない。

父は、ときどき相槌を打つぐらいで、おしゃべりには加わらなかった。孫と過ごす最後の一晩を、まるごと母に譲り渡したのだろう。仲の良い二人だ。近所や親戚の間でもおしどり夫婦として通っていて、夫婦喧嘩など、少なくとも私が実家にいた高校卒業まで、一度も見たことがなかった。そんな二人の血を引き、夫婦でいたわりあう姿を間近に見てきた息子が、離婚をして、翔太と別れてしまうことになるのを、両親はどう思っているのか。

離婚の経緯は、私は「いろいろあったんだ」としか説明しなかったし、両親も詳しくは問い質さなかった。ただ、父には一言だけ――「翔太の心に傷を残すことはするなよ」と諭された。ふだんなら父の言葉を引き取って、その何倍もしゃべる母が、そのときはなにも言わなかった。お父さんの言ったことをよく噛みしめなさい、と伝えるように、黙って何度も何度もうなずいていた。

母の携帯電話が鳴った。メールが着信したらしく、画面に目を落としたあと、(1)鼻白んだ様子でため息をついた。

結婚して城下町に住んでいる私の姉からだった。母は何日も前から、今夜顔を出さないかと姉を誘っていた。姉の子ども二人、翔太にとってはイトコになる男の子と女の子も連れて来るよう言ってあったらしい。

だが、姉は「いまは忙しくて家を空けられないから」とメールで断ってきた。

母はがっかりしていたが、じつを言うと私はすでに姉から「悪いけど、行かないからね」と告げられていたのだ。

「会わないほうがいいよ」――翔太のために。

「みんなで集まって、にぎやかに盛り上がって、思い出の一晩みたいになると、後々のことを考えるとよくないんじゃない？」

私もそう思う。おじいちゃんとおばあちゃんとは、淡々とお別れをしたほうがいい。川の水が流れるように、ごく自然に遠ざかって、小さくなって、薄れていって、そして忘れていけばいい。

もともとお盆と正月ぐらいしか帰省していなかったので、しょっちゅう会っている姉のところの孫二人とは違って、両親にも翔太にも、微妙なよそよそしさがあった。結局それは解消できないままになってしまったが、(イ)かえってそのほうがお互いによかったんだよ、と自分を納得させた。

母のおしゃべりの話題は、この秋に城下町で開かれるお祭りのことになった。築城百何十周年かの節目を祝って、大名行列が再現されるのだという。

戦国武将や忍者や日本刀が登場するゲームが大好きな翔太は、目を輝かせて「行きたい！」と言いだした。「おばあちゃん、連れてって！」

「うん、じゃあ、行こう行こう」

声をはずませて応えた母は、次の瞬間、父の目配せに気づいて、顔をこわばらせた。翔太も、あ、そうか、という表情になって、それきり黙ってしまった。

母はぎごちなく「いま、なにかやってるかな」とひとりごちて、リモコンを手に取ってテレビを点けた。バラエティ番組の陽気な笑い声が、思いのほか大きなボリュームで流れてきた。父も母も耳が遠くなってきたせいだろうか。ビールがまた苦みを増してしまう。

場の空気を変えたくて、ツバメの巣の話をした。駅以外で、どこか巣をつくっていそうな場所を尋ねると、母は総合病院と葬祭ホールの名前を出した。

「いまはもう、それぐらいしか、にぎやかな場所はないから」

拗ねたように、ぼそっと言った。

私はコップに残ったビールを空けた。気の抜けた生温さが、(ウ)そっくりそのまま苦みになってしまっていた。

翌日、実家をひきあげた足で、母に言われた総合病院に回ってみた。五年前にできた病院の広い駐車場は、高齢者マークをつけた車であらかた埋まっていて、タクシー乗り場もあった。

ツバメの巣は、確かにあった。二階のエアコンの室外機と庇の隙間につくっていた。だが、やはり巣立ちは終わったのだろう、ヒナのいる気配はなく、しばらく待っても親鳥が姿を見せることもなかった。

「どうする？　これがツバメの巣なんだけど、空っぽになってるな、もう」

翔太がどうしてもヒナがいるのを見てみたいと言うのなら、「ダメでもともとだぞ」と釘(くぎ)を刺したうえで葬祭ホールにも寄ってみるつもりだったが、正直、気乗りはしない。父や母が亡くなったら、妻はともかく、翔太は告別式に参列させるべきなのだろうか。妻が再婚して、新しいパパのほうのおじいちゃんとおばあちゃんができていたら、連絡をしないほうがいいのだろうか。そんなことも、ゆうべ布団に入ってから、寝付かれないまま、あれこれ考えていたのだ。

もっとも、翔太の反応は意外とあっさりしたものだった。

「もういいよ」

さばさばと言って、「しょうがないよね、来るのが遅かったんだから」と続ける。かえって私のほうが、翔太の物わかりの良さに戸惑ってしまう。

「来年、この巣を土台にして、また新しい巣をつくるんだよね」

「ああ……」

来年の話が出たとき、ゆうべのことがよみがえって、ひやっとしたが、翔太は巣を見上げて、バイバーイ、と両手を振った。実家を発(た)つときも、そうだった。玄関の外で見送ってくれた母は涙ぐんでいたし、父も寂しさを隠しきれない顔をしていた。そんな二人に、翔太は、まるで明日も会えるかのような軽い口調と明るい笑顔で、「じゃあね、おじいちゃん、おばあちゃん、元気でね、バイバーイ」と両手を振って、車に向かって駆けだしたのだ。

母の嗚咽(おえつ)は、聞こえていただろうか。車のドアを開け閉めする音に紛れただろうか。父は崩れ落ちそうな母の体を、肩を抱いて支え、もういい、早く行け、あとは心配しなくていいから、と私を手で追い払った。

私はツバメのヒナほど上手に巣立ちはできていなかったのかもしれない。

総合病院の駐車場を出るときに「いまからどうする？」と訊いた。帰りの飛行機にはまだ時間がある。城下町に出てもよかった。石垣と櫓(やぐら)しか残っていない城趾(じょうし)でも、お城の雰囲気ぐらいは味わえるだろう。

だが、翔太は少し遠慮がちに言った。
「あのね……昨日の駅、もう一回行っていい？」
「いいけど？」
「で、ホームから、線路に下りてもいい？　いいよね？　もう電車走ってないから、だいじょうぶだよね？」
ドラマの主人公が線路を歩いている場面がカッコよかった――いつかテレビで観たことがあるのを、昨日、ホームにいるときに思いだしたのだという。
「ぼくもやってみたいんだけど、いい？」
思いも寄らないリクエストに最初は困惑したが、だめだと言う理由も見つからない。
「よし、じゃあ行ってみるか」
おそらく、これが、親子としての最後の思い出になるだろう。

昨日と今日、たった一日しかたっていないのに、駅舎を抜けてホームに出ると、陽射しが目盛り一つぶん強まったのを確かに感じた。蟬時雨も、夏本番に向けて、昨日よりも勢いを増しているように聞こえた。
季節の初めというのは、いつもそうだ。一雨ごとに水温む春、木々の緑が日ごとに濃くなる初夏、ようやく先日終わったばかりの梅雨の時季も、気象庁が梅雨入りを発表すると、たちまち風に湿り気が増してくる。
私は先にホームから線路に下りて、翔太を抱き取ってやろうとした。ところが、翔太は「だいじょうぶだよ、自分で下りるから」と手助けを断った。
「けっこう高いぞ、無理するなよ」
「へーき、へーき、ぜーんぜんオッケー」

とは言いながら、いざホームの端に立つと見るからに身がすくみ、膝を折り曲げてしまう。「足元も悪いし、ほら、パパが下ろしてやるって」と私は両手を掲げて、翔太を迎え入れる体勢をとった。

「だいじょうぶ！　できる！」

翔太は甲高い声をあげるのと同時に、曲げた膝をバネにして、線路に飛び下りた、というより、落ちた。

着地すると、線路に敷き詰めた砂利が崩れ、体が傾いだ。足だけでは支えられずに、膝をつき、手をついて、四つん這いになった。危なかった。もうちょっとバランスが崩れていたら、顔から砂利に突っ込んでしまったかもしれない。

だが、とにかく、翔太は自分一人で線路に下りた。私は思わず「手とか膝、擦りむいてないか？」と訊きそうになったが、体を起こした翔太は、ほら、できたでしょ、と言いたげに、私にニッと笑った。

走りだす。駅舎を背にして、右――東京の方角に向かって。

何歩か進むと、また足元の砂利が崩れて、転びそうになる。つんのめって、四つん這いになって、また起き上がって走りだす。

何度も転んだ。砂利ではなくレールに膝をぶつけそうになったこともあった。砂利のとがったところに手をついてしまったのか、起き上がったあと、手のひらを口元にあてているときもあった。息を吹きかけて痛みをこらえていたのか、あるいは、にじんだ血を吸っていたのかもしれない。

それでも、翔太は私を振り向かなかった。立ち止まることもなかった。前に、前に、遠くへ、遠くへ、走っては転び、起き上がっては走り、また転んでは起き上がって、走りつづけた。

私はふと我に返り、翔太を追いかけてしばらく走ったが、途中でやめた。

はずむ息を整えながら、(エ)遠ざかる息子の背中を、じっと見つめた。

夏の陽射しが、線路の上に陽炎をたちのぼらせる。翔太の背中がゆらゆらと揺れる。

昔、ここには急行列車が走っていたのだ。

（重松清「鷹乃学習」による）

問(一)　傍線の箇所(1)(2)の語句の意味を簡潔に記せ。

問(二)　傍線の箇所(ア)に「早口になった」とあるが、「私」はなぜそのような態度をとってしまったのか。三十字以内で説明せよ。

問(三)　傍線の箇所(イ)に「かえってそのほうがお互いによかったんだよ」とあるが、どういうことか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(四)　傍線の箇所(ウ)に「そっくりそのまま苦みになってしまっていた」とあるが、「私」がこのように感じた理由は何か。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問(五)　傍線の箇所(エ)「遠ざかる息子の背中を、じっと見つめた」には、「私」のどのような思いが表れているか。本文全体を通じた「私」の翔太に対するまなざしの変化に着目して、七十五字以内で説明せよ。

三　次の文章を読んで問いに答えよ。

伏見街道にすみける者、絹糸をよりて世をわたるわざとす。そのたけ長くよる物なれば、町屋にてはなかなかなひがたし。ほど近ければ、豊国の馬場にゆきて、日ごとに糸をよる。(ア)心のままに広ければ、まことによき所にこそ。五月朔日にも、ここに出でて糸をよりけるが、洛中辺土すべて、上を下へ返すばかりに驚きまどひける大地震の、豊国わたりは、すこしもゆらざりけり。人のまゐる事もまれなりければ、「今日のなゐは、いかにふりぬらん。いささかも知らざりし」と語る。

独りふたり、聞きつたへ語りつたふ。国内通計の道理なれば、京中この事を聞きつたへ、「豊国こそ、このたびのなゐはふらざりけれ。そのしるしには、さしも神さびて崩れかかりたる社壇、すこしもそこねたる所なし。奇特の事也」といふほどに、うつり心なる都の諸人ばら、参詣の貴賤上下、(イ)さながら蟻の熊野まゐりのごとし。年六十より下の人は、生れてよりこのかた初めて逢ひたる大地震なれば、たましひきえ、胸つぶれて恐しければ、「もしや守りの神ともなり給ふらん」と思へる心ざしにや、日ごろは思ひもいださぬ所へ、我先にとまゐりければ、三条寺町より豊国まで、参詣の男女老少、ひしと町中につかへてせき合ひけるこそ、おびたたしけれ。神前には、散米、参銭、山のごとくに投げ入れ奉り、諸人手をあはせて、「南無豊国の大明神」と、をがみ奉る。そのかみ慶長四年四月十八日に額を賜ひて、廟号を豊国大明神と下されしよりこのかた、つひにこれほどの参詣はためしもなし。

いにしへは、近江、山城とて二人の神主を首として、あまたの祢宜、社僧あり。社領(1)いかめしく付けられしかば、神主もゆたかにして、八人の八乙女、五人の神楽をのこ、つねに神前に伺候し、きねが鼓の音たかく、鈴の声、松風に和して、めでたかりける事どもなりしに、時代うつりぬれば、神主、社僧も行きがたなく散り散りになり、さしも造りみがかれし社頭も、年々の霧にをかされ、露に朽ちて、つくろふ人もなければ、まのあたりの鳥居、楼門は跡かたなく、玉の瑞籬もやぶれくだけ、拝殿にかけられし歌仙の絵は、その人となくとり散らし、社壇は上もり、軒かたぶき、庭には草のみおひ茂り、あれはてたる有様、狐、梟のたぐひより外には、おとなふ者もなかりしに、今さら貴賤上下のともがら、道もさりあへず参りつどふも、(ウ)けしからず。

とりまかなふ人もなければ、かくにぎははしけれども、灯明をかかぐることもなく、いはんや神楽をまゐらする者もなくして、神前は(2)いとど物さびたり。

さてもまゐりつどふ諸人、(エ)手ごとに庭の草葉をかなぐりて、家にとりてかへり、おのおの軒にかけたり。いかなる者の、何事によりてしそめたりけん、おぼつかなし。茅薄は、みなむしりつくし、松杉の枝を折りとりしかば、茂りあひたる草も木も、みなまばらに折りかなぐりて、いよいよ社頭はあばらなり。洛中上下、家々の軒につるしかけたる人の心ばせ、豊国にあやかりて、町家もゆらであらなんと思ひけるなるべし。おろかにも惑ひはてて、をこがましかりけり。

（浅井了意『かなめいし』による）

（注）○豊国――豊国神社（現・京都市東山区）のこと。　○廟号――神社に付ける号。
○社領――神社の領地。

問(一)　傍線の箇所(1)(2)を口語訳せよ。

問(二)　傍線の箇所(ア)「心のままに広ければ、まことによき所にこそ」とはどういうことか。文脈に即して四十字以内で説明せよ。

問(三)　傍線の箇所(イ)「さながら蟻の熊野まゐりのごとし」とはどのような様子をたとえた表現か。三十字以内で説明せよ。

問(四)　傍線の箇所(ウ)に「けしからず」とあるが、筆者はなぜそのように考えるのか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問(五)　傍線の箇所(エ)に「手ごとに庭の草葉をかなぐりて、家にとりてかへり、おのおの軒にかけたり」とあるが、人々はなぜそのようなことをしたのか。文脈に即して三十五字以内で説明せよ。

四 次の文章を読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、一部訓点を省いたところがある。

羅念庵先生之先世有名慶同者、号善庵。嘗以市薬為済人之困、無親戚貧富、(1)以病請薬、必与善品。即負券不償、輒焚棄(a)不問。嘗大雪、夜半聞扣戸声、亟起問之、則境外儒生為母市薬者也。延入、坐而嘆曰、「夜市薬者多矣。要皆急其妻与子、未有為母者也。子其孝者与」。因労其良苦、飲食之。儒生出金釧質薬、問之曰、「而母命之乎」。曰、「病困、不知也」。慶同曰、「而母病間、聞市薬、問所質。云去金釧、心当恚忿、是益其病也。亟持去」。手授良薬、復遣人衛行。(2)歳且暮、儒生券未酬。(b)僮奴持之曰、「券直若干、奈何」。慶同笑曰、「汝為吾惜金耶」。投之

火ニ竟不レ問。明年春、有下騎ノ従ニ帷車ニ来ル者上。問ヘバ之ニ、則チ負券ノ儒生ノ母子也。其ノ母手ニ持チニ金布ヲ、拝シテ曰ク、「(A)微翁、不得至今日。翁ハ児女視レ我ヲ、我ハ無シニ以テ報イル。病起リテ、(イ)手織ツカラ此ノ布ヲ為レ寿ヲ、是ヨリ以後期ニ願セント翁世世子孫綿綿シ纚レタルコト、如キニ此ノ布ノ矣」。慶同受ケテ而復タ遺ニ贈スル之ヲ。其ノ善行若シ此カクノ。

（潘士藻『闇然堂類纂』による）

（注）○羅念庵――明代の儒学者、羅洪先のこと。　○先世――先祖。　○負券――借金の証文。
○儒生――儒学を学ぶ学徒。　○金釧――ここでは女性用のブレスレットのこと。
○病間――病状が快方に向かうこと。　○恚忿――怒ること。　○僮奴――使用人、召使い。
○帷車――ほろ付きの車。　○病起――病気が治ること。
○綿綿纚纚――途絶えることなくつながって美しい様子。

問(一)　傍線の箇所(1)「以病請薬」、(2)「歳且暮」を、すべて平仮名で書き下せ。現代仮名づかいでよい。
問(二)　傍線の箇所(a)「不問」、(b)「未酬」の意味を記せ。
問(三)　傍線の箇所(A)「微翁、不得至今日」を口語訳せよ。
問(四)　傍線の箇所(ア)に「聞市薬、問所質」とあるが、どういうことか。本文の内容に即して三十五字以内で説明せよ。
問(五)　傍線の箇所(イ)に「手織此布」とあるが、儒生の母はなぜこのような行為をしたのか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。